

## コントの社會連帶思想 (二)

米田庄太郎

### (三) 第二期に於ける社會連帶思想

前節に於て述べし處によりて知られる如く、コントは實質的には既に彼の思想生活の第一期に於て、社會連帶思想を大體上説述して居たのである。而して是れはさきに述べし如く、新に社會學を建設して、社會學的に社會を改造せんとする彼の根本的主旨の上から考へて、當然であることが察知されるのである。併し彼の第一期の著作中には、彼は連帶(*la solidarite*)或は社會連帶(*la solidarite sociale*)と云ふ語を全く用ひて居ない。而して彼の第二期を代表する彼の紀念的大著作「實證哲學講義」(*Cours de philosophie positive*)に於ても、千八百三十九年に公にせる第四卷社會哲學の理論的部門「*La partie dogmatique de la philosophie sociale*」の中に始めて此の語を用ひて居る。尙ほ余の調べた處では、彼が同卷中始めて此の語を用ひて居るのは百四十四頁に

於てゝある。但し是れは余の調査の粗漏なりしが爲めで、夫れ以前にも彼は何處かで此の語を用ひて居たかも知れないが、とにかく彼が盛に連帶と云ふ語を用ひ出したのは、同頁以後であるのである。

尙ほ注意す可きは、コントが連帶と云ふ語を始めて用ひたのは、諸科學間に於ける相依不離或は相互依存の關係を表示するためであつた事である。右の第四卷百四十四頁に於て、彼が始めて此の語を用ひたるは、左の場合に於てゝある。

新政治哲學を必然的に特質付けねばならぬと思はれる粘着性或は結合性及び同質性を總括的に評價する爲めには、最後に、此の哲學はかくて現在に關しても亦過去に關しても、種々なる社會的觀念の全體系に於て、最も完全なる連結を確立すると同時に、又此の體系を自然哲學の總體に、直接な又不可分の仕方で結び附けると云ふことを、注意するだけで充分である。但し自然哲學は此の際右の避く可からざる擴張によりて完成され、夫よりして是れまでは本來空想的であつた知力的統一の永久的決定的な一状態を實現するであらう。而して其の狀態に於ては、人間の概念の主要なる諸部類の總てが、必然的に同一の基本的な方法に従ひ、一切の有り得る諸現象に對して、同質的諸法則の合理的一系列を呈出するであらう。

又一の嚴格なる科學の位階的秩序は、其等の同質的、法則の合理的一系列を、精確に整列するに到るであらう。此の必然的連帶の考察は、疑ひもなく、特に科學的のものと考へられねばならないが、しかも余は此の際之を表し、指摘することが必要であると判定した。是れかゝる連結は明らかに新政治哲學の漸次的勢力増進を助ける傾向を有する強大なる影響を及ぼすからである。(P. P. INKERS)

コントは諸科學は其の對象の普遍性の漸次的減少、複合性の漸次的増加及び人間との利害關係の漸次的増加を標準として、位階的に分類せられ、一定の位階的秩序或は體系をなすものと見ると同時に、又彼等の間に相互依屬の關係が存するものと考へたので、諸科學間に存する密接な關係の存するを證明するは、實に彼の科學分類の一特徴隨ふて又彼の實證哲學一般の一特徴であるのである。コントは機會ある毎に、各科學が其の上に位する科學とも、亦其の下に位する科學とも、甚だ密接なる關係を有することも詳しく論述して居る。彼の考へる處によれば、各科學は下位の科學から其の方法を受けて、之れに自己特有の方法を加へ、更に自己の方法全體を上位の科學に送る。而して科學の位階的秩序に於て、最高位を占め、隨ふて總ての他の科學の影響を受ける社會學も亦、總ての他の科學の上に重大なる影響を及ぼすのである。

尙ほコントは單純なる科學的問題の研究も、幾多の科學の協力を要すると考へた。かくて諸科學は其の方法に關しても、亦其の目的に關しても、相互的に貸借關係を有するのである。而してコントは諸科學間に存する右の關係を、實證哲學第四卷以前の著作に於て幾度も論述して居るのであるが、同卷百四十四頁に於て、始めて此の科學間の關係を連帶 (*la solidarite*) と稱し、夫れより更に諸般の社會現象に於ける同様の關係をも亦連帶と稱し、連帶及び連帶的 (*Solidaire*) と云ふ語を盛んに用ひて居るのである。然らばコントは何故に此の頃からして連帶及び連帶的と云ふ語を切りに用ひ出したか。是れは余の知る處では、まだ何れのコント研究者も注意して居ない問題にして、余もまだ詳しくは研究して居ないで、此處には只余の思ひついた事を少しく述べるに止める。

夫れ社會連帶思想が、第十九世紀の前半紀の終り頃から、佛國の思想界に普及せることに就て、最も功績のあつた最初の人は、普通にピエール・ルノー (*Pierre Leroux, 1797—1871*) であると云はれて居るが、彼は其の著「サマレッツの同盟罷業」 (*La Grève de Samarez, 2 vol., 1863*) の中に、

余は始めて連帶と云ふ語を法律家から借りて哲學に詳しく云へば、余の見解に

從へば、宗教に輸入したので、余はつまり人間の連帶 (le solidarité humaine) を以て、基督敎の慈善に取り代へんとしたのである。

と云ふて居る。而してビエル、ルルーの研究に就て、今日までの處で、最も勝れたる著作と認められる可きペ、フェリクス、トマ氏の「ビエル、ルルー」(P. Felix Thomas, Pierre Leroux, Sa vie, Son Oeuvre, sa Doctrine, 1904) によつて、

假令ビエル、ルルーは此の語を創造したと云ふ功績を有しないとしても、少なくとも彼は此の語に、彼の同代の人々の著作が證明するが如く、汎く用ひられ、又其後今日まで保持されて居る處の、甚だ精細な特殊な意味を與へたと云ふ功績を有する。

(p. 201)

と云ふて居る。併しビエル、ルルーが其の著作に於て此の語を始めて用ひたのは、何年頃であるか。「サマレツの同盟罷業」は寧ろ彼の晩年の作にして、彼は夫れ以前に多數の著書及び論文を公にして居る。併し千八百三十九年即ちコントの實證哲學講義第四卷の公にされし以前に、ビエル、ルルーの公にして居るのは、ゲーテのウエルテルの翻譯と二三の小冊子だけである。然るに其等の小冊子や翻譯は京都帝國大學の圖書館や研究室には見當らないので、調べることは出來ない。併し其等の小冊

子の題名から考へると、ピエル、ルルーは未だ其等の小冊子に於ては連帶などと云ふ語は用ひて居まいと思ふ。(余は他日ピエル、ルルーの社會連帶思想を研究する爲めに、目下ピエル、ルルーの作全部を佛國の書店へ注文して居るから、幸ひに彼の著作全部を手に入れることが出来たならば更に確實に此の問題に就て論ずることが出来ようと思ふ。)さればコントはピエル、ルルーに倣ふて彼の實證哲學第四卷から連帶及び連帶的と云ふ語を、盛んに用ひ出したとは思はれない。尙ほピエル、ルルーの如くに強き人道主義的、宗教的情調を加へて居ないが、併し大體上同様な意味で連帶と云ふ語は、既に傳統派の哲學者によりて用ひられて居る。(經濟論叢に於ける拙稿、佛國傳統派の社會連帶思想、參考)。要するにコントは此の語を傳統派より借用したものとと思ふ。併しコントは早くから傳統派の哲學者の著作殊にル、メートルの著作を愛讀して居たのであるから、特に千八百三十九年から連帶と云ふ語を、切りに用ひだしたのには其の外にも理由がなければならぬと思ふ。最も夫れはほんの一寸した機會からであるかも知れぬ。とにかく余はまだ其の特別な理由を發見しない。

却説上に述べし如く、コントは諸科學の相互的影響、相互的依存の關係を連帶或は連帶的と稱して以來、更に社會現象間の相互的影響、相互的依存の關係をも矢張り連

帶或は連帶的と稱して之を論究して居る。併しコントは社會現象間の連帶を此の頃始めて唱へ出したのでなく、社會現象間に連帶關係の存することは、前節に於て述べし如く、彼の思想生活の發達の第一期に於て、早くから主張して居たのである。否な彼がサン、シモンに送つた最初の無名の書簡に於てすら、同一の思想は明らかに認められるのである。併し彼は第一期間には特定の言葉を以て右の關係を云ひ表はさんとする場合には合致(Consensus)と云ふ語を用ひて居ると思ふ。

(但し Consensus と云ふ語も *solidarit * と云ふ語と同じく、もと法律上の術語にして、合意を意味するものである。例へば *Consensus Contrarius* 反對の合意、*Consensus Expressus* 明示の合意、*Consensus Gentium* 國際合意、*Consensus Nuptialis* 婚姻の合意等の如きである。併しコントの用ひるが如き哲學的意味にては合致と譯す可きである。尙ほ序に一言して置くが、*solidarit * と云ふもと佛國ナポレオン法典上の法律語を連帶と譯するのは、我國の法學者の古い譯し方であるので、井上氏の獨和法學大辭典によると *solidarit * は全部的關係、全部的責任關係と譯され、又 *solidar* 或は *solidarisch* は全部的と譯されて居る。例へば *Solidarberechtigung* 或は *Solidarische Berechtigung* は全部的權利と譯され、又 *Solidarobligation* 或は *Solidarische Obligation* は全部的債務關係と譯

されて居る。余は右の譯し方が果して我國の法學者間に一般に用ひられて居るのか、又法律上では右の如くに譯するのが正當であるか、敢て知らないが、とにかく社會學或は社會政策學上の用語として見る場合には、ソリダリテ或はソリダリテートを連帶と譯する方がより多く正當であり、又便宜であると思ふ。例へば *solidarités sociale* を社會的全部的關係或は社會的全部的責任關係と譯するよりは、之を社會連帶と譯する方が一層簡便であり、又今日夫れが社會學及び社會政策學上に用ひられる意味を一層よく云ひ表はし得ると信ずる。

コントは連帶と云ふ語を用ひる前に、一般に合致と云ふ語を用ひて居たと思はれるが、尙ほ連帶と云ふ語を用ひ始めたる後も、矢張り合致と云ふ語を同じ様な意味で併せて用ひて居る。さればコントにありては、合意と合致とは殆んど同じ意味の語であるを解釋することも出来るので、パールト氏の如きは左の如くに述べて居る。

合致は協働を意味しない。コントは協働を調和と云ふ語で表はしたと思はれる。コントの合致と云ふは、單に相互作用及び夫れより生ずる相互依屬を意味するだけである。此の事は上に引用せる説明から、又コントが無機的な天文學的或は科學的體系にも、此の語を適用して居ることから考へても、承認される。されば



合致と連帶とは、第四卷二百三十七頁の示す如く、殆んど同意味の語である。(Pauli Parth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie. I. 3. u. 4 Auflage. s. 180)

余もコントが科學間の相互關係や、宇宙諸現象間の相互關係或は社會諸現象の相互關係を、純理論的に考察する場合には、連帶と合致を殆んど或は全く同じ意味に用ひて居たと考へる。併し彼は後連帶の概念には倫理的意味更に宗教的意味をも含ませて來たと考へられるので、かゝる場合には彼の連帶の概念は合致の概念とは、其の内容を稍々異にして居ると思ふ。かくて余はコントが千八百三十九年に公にせる實證哲學第四卷に於て、始めて連帶と云ふ語を盛んに用ひ出した時代に於ける彼の連帶の概念と、後千八百四十二年に公にせる同書第六卷に於ける彼の連帶の概念との間には、稍々差異の存する場合があると考へるのである。尙ほ始めに於ても彼の連帶の概念と、合致の概念とが殆んど一致するが如くに思はれるが、しかも彼は尙ほ右の二つの言葉を併用して居るのは、是れ彼の頭に於ては、二つの言葉に關して少なくも或感情上の差異が陰に存して居たのではあるまいかと察せられる。而して其の感情上の差異と云ふは、つまり連帶の概念は始めから暗に倫理的情調を帯びて居たと云ふことではあるまいかと思はれる。蓋しコントが此の語を借りて來たと

思はれる傳統派の思想に於ては、此の語は本來倫理的及び宗教的意味を舍めるものであるからである。

余は此處に先づ實證哲學第四卷に於けるユントの連帶の概念の詳しき意味及び夫れと合致の概念との關係を論究し、次に同書第六卷に於て、彼の連帶の概念が如何なる變化を受けた場合があるかを究明したいと思ふ。但しユントの連帶概念が大に倫理的更に宗教的なる思想に發達したのは、彼の思想生活の第三期に於てあるが、夫れは先づ彼の思想生活の第二期、即ち實證哲學に於ける彼の連帶の思想を研究した後に、考究することゝする。